

# 「あとづけの理由」からのプロセス信頼性主義批判

阿部裕彦 (Hirohiko Abe)

慶應義塾大学

分析系現代認識論の伝統的に主要なトピックの一つは、単なる真なる信念に何が付け加われば知識になるかというものである。真理、信念に付け加わるべきこの第三の要素は正当化と呼ばれている。この問題に関する主要な立場の一つとして、アルヴィン・ゴールドマンによるプロセス信頼性主義が知られている。プロセス信頼性主義によれば、ある信念が正当化されているのは、それが真なる信念を高い割合で生み出す信念形成プロセスによって生み出されているときである (Goldman 1979; Goldman&Beddor 2016; 上枝 2020, pp.77-84)。この定式化において、プロセス信頼性主義は、正当化を信念形成のプロセスに見出していると理解できる。

しかし、われわれの日常的な知識帰属では、信念形成のプロセスに含まれていない、いわば「あとづけの理由」と呼べるものが正当化に寄与している場合があるように思われる。本発表では、そうした理由によってこそ正当化条件が満たされる知識帰属の事例を紹介する。この事例の分析を通して次の二点が明らかにされる。

1) まず、プロセス信頼性主義では、ある信念形成プロセス・トークンの属する信念形成プロセス・タイプの信頼可能性、すなわち真なる信念を生み出す割合によって正当化が判定されることになるが、本発表の事例から分かるのは、信念形成プロセス・トークンの終点をいつと考えるかについて問題が含まれているということである。はじめてある信念を抱いたときにはまったくの偶然でその信念が真だったに過ぎないにもかかわらず、そのあとに適切な理由を獲得することがある。この場合、当該信念が形成された時点を、はじめてその信念を抱いたときと見なすのか、それとも理由獲得後と見なすのかによって、それぞれの信念形成プロセス・トークンの属する信念形成プロセス・タイプは異なりうる。本発表の指摘するところでは、ある信念を抱いたままその同じ信念を再び形成することがあると認めない限り、プロセス信頼性主義は、この場合の信念形成プロセス・トークンとして前者を採用することになる。そうである以上、「あとづけの理由」だけが正当化に寄与している事例では、プロセス信頼性主義にしたがうと、正当化条件が満たされないことになってしまう。このことはわれわれの日常的な知識帰属の直観に反するだろう。

2) そして次に、この第一の点からも明らかになるように、正当化のプロセスと信念形成プロセスとは独立である。したがって、信念形成プロセスから正当化の理論を構築するプロセス信頼性主義には問題がある。以上が本発表の概要である。

以上の二点と類似した点は、ピーター・クラインによっても「**HED 問題 (the Hazard of Empirical Disconfirmation problem)**」という名前ですでに提起されている。クラインは「信念の起源理論 (etiology of belief theories)」という分類のもとに追跡理論や信頼性主義をまとめて、信念形成の原因や起源が曖昧であると批判し、それらが真なる信

念と知識の差とならないと批判している (Klein 2019, p.401)。しかし本発表の解釈では、クラインの批判をプロセス信頼性主義は回避できてしまう。すなわち、クラインの議論はプロセス信頼性主義批判として不十分である。

本発表の議論はとくに次の点でクラインの議論と異なる。クラインは、「あとづけの理由」と本発表が呼ぶものが信念形成プロセス・トークンに含まれているか否かについての判断を保留したうえで、「あとづけの理由」獲得前の信念には知識の帰属を躊躇い、獲得後の信念には知識を帰属する。クラインによれば、この差は、信念形成プロセス・トークンの差ではなく、適切な理由を引き合いに出せるか否かに存する (Klein 2019, pp.401-3)。しかし本発表の事例では、同一信念の再形成に関する場面をより明確に設定することで、同じ信念が保持されたまま再び形成されうることを認めない限り、「あとづけの理由」の獲得は信念形成プロセス・トークンに含まれないと論じる。本発表の指摘は、プロセス信頼性主義では、「あとづけの理由」をもっているにもかかわらず知識帰属できないという、われわれの直観に反する帰結が導かれうるということである。

本発表の目的は、プロセス信頼性主義に対して批判を提起することである。本発表は、ある信念の正当化に寄与しているのが「あとづけの理由」だけであるような事例を紹介し、信念形成プロセスによっては正当化の説明が果されないことがあると示す。そうすることで、信念形成のプロセスによって正当化の理論構築を試みるプロセス信頼性主義が批判される。

なお、従来、プロセス信頼性主義への批判の一つとして、信念形成プロセス・タイプの曖昧性は指摘されてきた。ある信念形成プロセス・トークンは複数の信念形成プロセス・タイプに属しうる。さらにこれら複数の信念形成プロセス・タイプは、それぞれ異なる信念を生み出す割合が異なりうる。すると、どの信念形成プロセス・タイプに属するかに応じて、正当化条件を満たすか否かも変わりうることになる。これは一般性問題 (generality problem) と呼ばれる問題である (Conee & Feldman 1997; 上枝 2020, pp.84-9)。しかし本発表が指摘する問題はこれとは異なる。本発表では、信念形成プロセス・タイプではなく信念形成プロセス・トークンが問題になる。仮に信念形成プロセス・タイプが固定されたとしても、そのことは、それに属するの否か判定しなければいけないのがどの信念形成プロセス・トークンなのかの決定には影響しない。

#### 参考文献

- Conee, E. and Feldman, R. (1998) "The Generality Problem for Reliabilism," *Philosophical Studies* 89(1), pp.1-29.
- Goldman, A. I. (1979) "What Is Justified Belief?" in Pappas, G. ed., *Justification and Knowledge*, D. Reidel, pp.1-25.
- Goldman, A. I. and Beddor, B. (2016) "Reliabilist Epistemology," *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (Winter 2016 Edition), Edward N. Zalta ed., URL = <<https://plato.stanford.edu/archives/win2016/entries/reliabilism/>>.
- Klein, P. D. (2019) "How to get Certain Knowledge from Fallible Justification," *Episteme* 16(4), pp.395-412.
- 上枝美典 (2020) 『現代認識論入門 ゲテティア問題から徳認識論まで』 勁草書房。